日本経済新聞　2011年（平成

文　化

明大マンドリンの旋律

◇古賀政男先生の後、常任指揮者務め40年◇

甲斐靖文

明治大学マンドリン倶楽部（マンクラ）は1923年創立と日本屈指の伝統を誇る学生オーケストラだ。私は恩師の作曲家、古賀政男先生の後を襲って音楽監督・常任指揮者を務め、今年で40年目になる。

♪　♪　♪

衝撃だった大分公演

1972年のある朝、古賀先生から電話がかかってきた。「すぐ来てほしい」。先生の家に出向くと、数人の学生も一緒に待っていた。「おれの後を継いでマンクラの音楽監督になってくれないか」と頼まれた。

私は当時32歳。日本コロムビア専属の作曲・編曲家として活動し始めて5年がたっていた。勉強中の若輩者だからと一度は断ったが、先生の強い意志に「わかりました、おやじさん」と返答した。明大を卒業してから10年目。再び古巣のマンドリン倶楽部に舞い戻ることになったのだ。

私は大分県別府市で生まれた。高校までは白球を追う野球少年。でも、歌うことも大好き。NHKの歌番組「ラジオ歌謡」から流れる「白い花の咲く頃」「あざみの歌」といった曲を口ずさんでいた。

ある日、5歳上の兄に誘われ、大分市で開かれた明大マンドリン倶楽部の公演に出掛けた。洗練されたアンサンブルを目の当たりにして、驚いた。「学生服を着ているが、彼らはプロに違いない」と思ったほど。自分も入ろう。そう決意した。

58年、明大法学部に入学し、あこがれのマンドリン倶楽部の部室を訪ねると、周囲は剣道部や空手部といった運動部ばかり。汗臭いにおいが漂っていた。その年の入部者は百数十人もいた。まだまだ娯楽の少ない時代。私と同じように音楽に飢えている若者が多かったのだ。

公演する明大マンドリン倶楽部

1年生はまず教則本を入手して、課題曲を弾けるようになるのが目標。放課後、部室で上級生の指導を仰ぎ、午後7～8時まで練習を続ける。弾けるようになると、上級生と合奏する資格を得るための試験を受ける。上級生の前で緊張しているからなかなかうまく弾けない。私も2度目で何とか合格した。

♪　♪　♪

夏合宿で地獄の猛特訓

夏休みに入ると、古賀先生も参加する夏合宿が待っていた。場所は佐渡島のホテル。練習は午前9時に始まり、午後10時までが合奏。それから12時までがパート練習で、深夜3時、4時まで個人練習が続く。厳しさに音を上げる新入生が多く、例年9月になると部員はごっそり抜けている。

秋になると、1年生の中から、東京近郊の演奏会に同行し、ステージに立つ者も出てくる。私が現役のころは公演数が多く、年間120～130公演をこなしていた。今はそれほど多くないが、週末や休日には各地の明大校友会や地方自治体の招きに応じて、公演を開いている。

現在、私は年2回ある1週間の合宿、春と秋の定期演奏会には必ず参加し、学生たちと汗を流す。思い出は尽きないが、78年の古賀先生の音楽葬や、88年の三木武夫元首相の衆院・内閣合同葬で演奏したことは印象深い。三木さんは明大OBで、母校の徳島県上成中学校の校歌を古賀先生と一緒に作っている。そんな縁で、奥様の睦子さんから、「マンドリン倶楽部に校歌を演奏してほしい」と依頼があったのだ。

伝統のマンクラも時代に応じて変わってきた。一番の変化は、創立以来男子部員だけだったのを、入部希望者が減ってきたため、97年から女子部員も受け入れるようにしたことだ。一時は部員の半分近くを女子が占めた。現在は3分の1ほどだが、今年は初の女子学生指揮者が誕生した。

一方、変わらないのはクラシックを演奏するとき、男子は全員学生服姿でステージに上がること。実は古賀先生が存命のとき、「学ランは古くさいからブレザーに変えよう」とおっしゃったのだが、学生側が拒んだ。折り目正しい制服姿はOBや観客からも好評だ。

♪　♪　♪

古賀イズムの担い手

ジャンルにとらわれず偉大な楽曲を生み出した古賀先生。クラシック、歌謡曲からポップスまで多彩なジャンルをこなすマンドリン倶楽部は古賀イズムの担い手でもある。このほど2枚組のCD「古賀政男とその時代　明治大学マンドリン倶楽部　昭和歌謡を奏でる」（コロムビア）が発売されたので、耳を傾けていただければ幸いだ。

私は来年73歳になる。古賀先生が亡くなった年に並ぶが、もう少しは続けられるだろう。合宿で学生たちと酒を酌み交わしながら、古賀先生が育ててきた音楽を一緒に作り上げていく。こんな喜びはほかにはない。（かい・やすふみ＝明治大学マンドリン倶楽部音楽監督・常任指揮者）